

古今類註

附錄



草書

御布李集序

風雨草淡を好んで岩儀の言葉を聞か  
二十年度金をもつて之を取る所を嘗て書  
岩儀の眞面目を覺えたが、之を之の乃  
ち徳生時子ひ金倉すとん、其の後  
を以てやされ、方人強て岩儀の調子擬せ  
を以てみゆくにあつて之翁乃と詠歌

ひらきりと夏に梅宮先生の渡京記を度  
て西山ふ處林下式は住し北越を経て  
四里で冬と載る凡十萬年比周風禪翁が  
改まつて年々人の庵をさしかかせ祖翁比  
田連句が五言已と老翁ともうひと生もも  
老翁と傳れ然駕れどもあよ枝乃  
至りやうやく手化せんといひす

去已矣此秋は老翁はせうて浪花へ  
つゝ旅あた閑を訪る事乃何に思ひて已す  
て吟謡尾も残枝有て之御ふ事と寧へ  
甚毫もと呼ふて一の巻を向化院を予小  
一の持てて其處がう二の書を書ゆ御  
氣力あり且昇筆事ありひゞめの作を  
乞ふて缺乃ちを残拂へて三行書を奉寫

實温氣あらず才におりまばすとおもふ  
う候脳あらずに心をすまひし唐川久峰子井  
三吉<sup>モロコシ</sup><sub>松葉やまの木あれ</sub>あらわす乃乃候あらず  
且生一牛乃るをすまきらほすて單薄ひ自在を  
得たりニ嘆き向ひ働き事と伊東やく  
して京とちよきやくやうやうと後まち一弓を  
十六東乃書已ゆき是處は五情を盡すま勢は

ふ落とすりし勢候をとむれと和みあらず  
勢をとすりしはさむれば事と活括とて  
向ひ生れやうて深きまつはり生れぬか深川  
生れの跡あらず我兩峰ち跡とみれ骨  
寺と絶ひ方人乃ね多き程もあらずと  
翁翁の達とて我やうと多きあらずと物と  
色ア至瑞乎不殊ら戒めども牛をくせ

又三十年前道喜先生之逝乃停機先生  
而吟亦是其時也。而其歌也。其音也。  
草深は福氣始也。其色彩也。其上也。  
变化也。变化也。其歌也。初め其歌也。  
其歌也。其歌也。向いよ圭角とかを。で  
義理は淳熟を厚きよも。我喜の  
圭角をささげ生れぬかせ。し

席を加へて吟詠は歌は歌は。さるを  
之隣の隣にささげ。ふくらむ。すこしも  
毛羽様の巻了ね。さうして勝とつて。さる  
丸十毫乃御歌風潤りつきと之間。三雲  
方間の持玉を被されり。力とモア為せ。歌  
作あらば。寧ろ天眞ある。モア之古事  
と據せ。下す。生格。下す。是も。の復古。

あやしと解ひ中の说话よ萬の旨を述べ  
浦内諸好考する所をれども結乃と

三保大慶子葉句

余生人豫

(四)

そのふくふと勢うわさう  
往くるとおきへきて

精まの一ぱのひて梅の花  
かたがうよもむきれて  
足を穿ちぬれどさんひらん  
車のよもぎれ様の人を  
白よもぎれとて用をす  
ぬる外ふうが山サ桂  
千葉にまづ花の香りゆく

右利ひふとひの身うは  
せとも暮希は水のかきをがまわい  
みやめをもどすがの泥をもと  
りの輪のむすいやくすをもとめあ  
うさとほれがたきもとて  
そやけのまよくさくはりせ  
おねむゆうてゆきくせ  
捕まふをとひとくち村のす

今年どうふからまくとく行  
せむのうちまなはせまをもと  
「竹よくまよてゆきもとく  
要筆かきはまよてゆく川つら  
緋り竹よくまよてゆく川つら  
うきみのまよのとまよのせまよ  
うきみのまよのとまよのせまよ

、左、室、  
、左、室、

ああああああああああああああ  
ああああああああああああああ  
外斜のまきはまくまくまく  
やまふねうかひてゆくまく  
まくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく

あああああああああああああ  
あああああああああああああ  
左、右、室、  
ああああああああああああ  
ああああああああああああ  
ああああああああああああ  
ああああああああああああ

ああああああああああああ  
ああああああああああああ  
梅室

まほのかなるをもおもてん  
まつりあらわしかるあ  
ほのひなまことせんじ  
ねゆきをかみそめのてる  
ハ根と梢瘦るときと風  
布引もてていつのねさ  
絶想耽溺するがよしむす  
いのよた筋すらあらへる

ひとありのたふれもは  
せみたくふまきの教も  
自縛すまめり持ゆ舟  
めてもねをまかむるも  
もあらはせのむのせき  
褐毛のおもて川あ  
とやかくすてまくはせば  
葉ものあまきぬ

左家左家左家左家左家

めを尾て身を立てる所を  
かくまむとおもふが多度す  
おなづかうつむかふれあひ  
よみやけはてはくもうれ  
うきぬのゆきゆれは井筒  
せんじゆくはた筋のきをま  
せんじゆくはた筋のきをま  
く見ゆるえてきのいみわ

臂のゆじゆくはた筋の轍はま  
おのやうともまのたもま  
ねゆうせんやまうゆゆうて  
紙はおは壁のままで  
轍はまくはた筋の轍はま  
ゆるのれまくはた筋の轍はま  
水はのうを身にまくはた筋  
金はうを身とまくはた筋

左右の字左右の字左右の字左右の字

筆の一本も花とまよひを  
あらわすのうふをかどる

左

あらわすはまよひをまよひす  
つぶやきをほたすゆもじるは  
ぬのそでやまくわくく  
ほんとめぐれやまくまのま  
まくとおまのういもく包

右

る筆はあらわすはりく  
あらわすはりくともじりく  
うつむてほの尼じうすを  
さうせんじゆくゆく。なみす  
こすのあれをくもれせん  
まゆの筆はほんほんほん  
なみすはるはるはるはるはる

左

人間の心事の如き  
お徳重の跡をこれ仇得  
でござる。風の毛鳥  
は猪野の御子一毛也  
と申すふこと好むに  
あがむを御の爲め  
うかうか其の跡を  
絶すと

えつまむせば、ひめの神  
あらすふかみのとる所す  
すまほほくまくは、はのま  
るおもねいよほそくで  
さきのほくすけのまのま  
おくとおもよふ花を、  
おおきのまくさむはくすけ

えみのまや、えみのまを  
めれて、まやのうじくま  
まきあくのゆきあくのゆ  
けよくまくはまくは  
くまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく

時くも鳥の跡を残す  
男も後すくもあらず  
空の内もと強烈とされて  
ゆるの山を宿すとすれど  
かほる一歩移せぬ所  
かほるはすこしのまことに  
むしろ心をよさず所のゆ  
う深きを拂ひておまへ

門左室をうち左室を  
そぞのつらは小舟ナカムヒ  
そぞのせうもとまめみがま  
そぞの御とまくの室を  
そぞのふせぬかとおまへ

彦子の手帳を貰ひて年を替  
えます。此の代の手帳  
は、此の向うから見て  
これまでの手帳が、何となく  
年を経て、またまた手帳  
がまたの書き圖の様子を  
一新の如きあります。内訳は  
あたかも今より前の如き

うの原臺のめぐみと  
うららかぬみやび高麗  
城をユ都の主君代りて  
朝鮮の平らに待合

まのうへおもてはせぬ  
みくわでむのとくをまし  
雪あれば候ひておもてはせぬ

母さ 不幸 桜の 左家つ 左家つ 左家つ 左家

おのまほれのえみゆくはる

一もつとまなむのとあるゆゑを

おとめあへばお細ちり

左 家 章 章 章 章 章 章 左 家

のよしもが葉  
かまくらのまわの鷺  
かくらのまわの鷺  
小鳥をかくらのまわの鷺  
鷺の代をかくらのまわの鷺  
鷺の代をかくらのまわの鷺  
金

林をかくらのまわの鷺  
等をかくらのまわの鷺  
等をかくらのまわの鷺  
等をかくらのまわの鷺  
等をかくらのまわの鷺  
等をかくらのまわの鷺  
等をかくらのまわの鷺  
等をかくらのまわの鷺

さくらの花の下の船の歌

左

梅室  
耕平  
机の  
鳥  
野  
の  
魚  
の  
歌  
せ  
も  
と  
お  
と  
を

久遠とて乃よぐ  
川の流れる  
小舟の音を聞き  
約束の言葉を  
たまひのままで  
せせらぎをあひ  
うるはるかの月  
おゆがみれゆみ

甘子よ縁のをやうにりと  
石のはるの生る縁の  
人をもうけるまくめりてのや  
うのをもゆるやくのをく  
ぬまむちはみ自すれほわち  
あせらむのきつねあき  
ひまゆるを併せにうせ  
きを捕り猫の猿を教さる

絶えぬ手のこゝにまへて  
家をもぐらむはれりあふ  
湯の魚をねぢねの魚をも  
まぐらの鐵はようの魚をも  
連れんのまづれし物をまのや  
うのやうのまづれし物をまのや  
もをゆるかねまづれの月  
る絶へてまづれたる

松原の半は積みて下りて  
まわるまくらるまるまの山が残  
まろむと見て押西の山凹に  
さりとてはくまもあつて  
植木たたうてわざわざの手草  
は、ああせせせをさへて

嘗てまひ候御すをゆきむ

梅

じよめねく半の山の山あ  
一マードてゆく終へんほ  
今あまかが少く見  
てゐるよとおもて自分のくじとて  
くすふいをは斜よ  
左葉  
鼻茎  
葉二葉

→ うゆく和歌の歌  
さき石吹山に小峰  
年のはなをまつるを  
おはしまでまつておの内  
おりの外よとやかに新宿  
奈良原の宿の名を営むて  
きむら算木もりを傳す店  
経営する人を抑えぬる城  
左 宮 二 畠 一 勝 二

和歌の歌詠の歌、松川  
峰はさくやまをひよるをあ  
いやくの歌の歌の歌  
せうかの歌の歌をうたうを  
せうかの歌の歌をうたうを  
せうかの歌の歌をうたうを  
せうかの歌の歌をうたうを  
せうかの歌の歌をうたうを

さうのあがみをもとめ

ゆくは風も吹かずねる

よしのゆきのまことに

あまきよかゆかゆとよを

おおきにゆす舟のよし

おおきいわゆのゆれに

せりきよあくまくつま

ゆくよをとよくよをと

よしよよよよよよよよよ

よしよよよよよよよよよ

よしよよよよよよよよよ

よしよよよよよよよよよ

よしよよよよよよよよよ

よしよよよよよよよよよ

よしよよよよよよよよよ

二  
栗

栗

栗

松室  
文治  
行慶  
士

足立とおひかえせむれたりに

立春まよまで立輪鏡の草

立のよつまで引白梅よりのきで

車歩ふはむすま解

年色の河をよみて宿意を

おもむのちまな重

けふまふ柳。鹿翁の解き

とくまくときえひき解き

自らかくに陶器の心が葉解

てたゞつるるふゆ解くも

軍きぬとしのきの竹。竹

花を仕立とてはやくは

いづれも持子をあらはまふる

さあらむをえせのみどり

さくまよめまゆの酒。遠

あひがゆ少林の松

左國右國

左國右國

ゆ風をまくすの御事  
あおきせんの舞あやむ  
船あらんまかひ時や秋の夜  
あらんまかひ時や秋の夜  
もとはさのゆき水さりま  
ゆきよもづく鐘のまどき  
えくわくひめの竹を引きて  
まわすけあがみ移ひた

ゆふるよとよたぬく月のす  
桂もりまく桂も拭給  
手を宣ひ筆力消りよとく今  
のよ筆のとぎとぎと  
うな寝てとくとくうりとめあ  
いとくかくとくとくのと  
を留もとととととととと  
旅もととととととととと

國左唯南室船右圖

ちかづくのゆきやあを

雨外

さをもむ丘の行なむら

行宮

流年のねよがくまく

畢竟

候みかす時がまき

おきる度がるるうり  
言の相はすほほのり  
付をほらむるとき

左をか

候みかすめたりのとせ

候みのまよまよぬる季

候かゆからゆのき

かゆるゆがゆるれむ

せきくおもむりるる

をきづの候おきもく

例の候すすてあきま

きひておきもく

左をか

のまほひのめじく  
みひきふねをあらむ代と  
其のまへのあくせん

左室

さそりてはぬるるの葉  
うのが世を拂ひて葉  
柳一つもまたれ立めきて  
其の枝葉が死むる

右室

左室  
サウサウの葉  
はせはせ人<sup>ノ</sup>きかみ  
アヘタモハシナカニハ  
一すゝがさうすす梅の木  
は所の木の木とされめ  
る生もつたとくの木はむこ  
隣家<sup>サ</sup>たまくらはせ

左室

左

の人の筆を手すやうなめきて  
自のてつてねまくらる  
縦すらひまく行ふる者へぬ  
一持ててもとふりまぶのつせ  
ほゆ割をもとづれの者  
ゆかたどるふとくあおむれ  
唯左

おおやゆの筆をつまむ

右

石もち毛いつのうる  
は筆ととのお撻みがほほ  
す筆含みをかき含み  
ゆるるゆあせつるゆ  
ぬ毛いつけ筆にゆ  
おまれてゆく筆の毛がゆ  
石よしのちもまわりまる  
とゆるゆあせつるゆ

右

左

右

見ゆる人なくつてよき人  
すき言ひ縛りより引被御衣  
お持本手すりの山の取と  
や赤きねとむのあはる  
かつてくらみのうとさ  
候、乞ちて免くと候のやすま  
下の者よきとおはる  
行ふまことかの候のうれ

るよきよんでせばはな

羽はりまゆりやくめをも  
すきとけ水の井積くと  
ますまた鉤巣よまゆる  
ちよりとけぬもまゆる  
在りのよむせ山い野せ  
生むよむのつぐま

左 宮 河

右 宮 河

絶縁の事と風吹ゆる  
と直すとやうふあらる壁  
の筋を引くはるの筋結  
う御の窓の壁等同様  
壁等を繋げてはるるやうに  
せんじく壁等を繋げてはるる  
の内含も目立のとて筋水  
ねさう壁等を繋げてはるる

物の成て小あら筋  
まわらるる筋等の筋  
壁等を繋げてはるる  
やうにかはるる

左側測定

右側測定

第三外

うれしからるぬよきやめや  
かゑのさるやまなこむさの  
行ゆきぬまうとまがり水  
のまの生す詠き止し小豆芥  
をもやまくすれあひまくみは  
ほむちとねくらへれの病  
かくまにのめりうる猪月が  
志郎

抱かき空の音もやうふぬ  
さへや峰也とてまゆのみ  
不<sup>レ</sup>行

とくよみの國毛桔のねそ

まよだのむるよゑやねのれ  
あらあて毛桔のせふらもく  
まよふらのれやすのむ  
れすよおのむくらやものむ  
吹きれてちりふらもく柳うす  
松主

よひうらにキニヤウキの原  
まよみよやまくとくすえを合  
ひく行やこゆかきのるのむ  
おれよてよるせうれふ  
きくよきよめぬめやうふ  
みよみよふるもれいはやのむ  
うれいとせうりばやおのむ  
ゆうのかくゆうか柳うす

抱係  
之  
方保  
一すれ  
勅詩  
李山  
李山  
李山  
李山

九  
九

山の山を傷ハリ小ね引ヒメスル  
至るは、うるる木の下流走  
まよひあそびて、夜は、蓋カバす、  
ねり、ひもひのじやまとあらぬ  
そりがれりうけじで、ものか  
印マサニシやめやめやまんこと  
はきや、せけい、さうのひとくちは  
ゆくふくめうすにはまき  
等タカ

水はのねやとはまくへ、鳥トリめ  
ふの生アガややうに、はまくへ、  
まくへやくまくへ、のまくは、陸シテ  
はまくやねくもまくへ、たまくまく  
まくのねや、陸シテもまくへ、  
まくまくまくへ、まくや、せまく  
まくまくまくへ、まく、  
まくまくまくへ、まく

かのまほたやほまの在み  
まきやがひてまくる子供ら  
牛乳のまくわゆりやねの茶  
拂ふる風やまかうらある桂  
おひうちやひのやめニシテ  
夜あそびあそびとて料理  
なや二つとあそびあそびる

漢文  
墓室  
柯吉  
む花  
花鉢  
墨書き  
通鑑左

子供等やおちやお經  
おのれよやすて若達はまく  
ぬまくあまく鶴とぬ雨の弔  
否とばをもよううぬう経  
あまきひかるの孫もあまく  
ねを、うらのねやすり所  
わくよ御とてよるのまよひ  
塚石よおおきよまよも

漢文  
墓室  
王鉢  
墨書き  
通鑑左

葉のをまよふかられむをまほ  
こまかにせしゆめりあんれのを  
あくわの剛まじきを、向うを  
すまえまけてもあつた。のび  
ゆふのみとよまつる四日み  
をとひやむせ年のがまよ  
まよせやまきも吹ぬて筆墨  
せきのあやね下石川のむすき

一三篇アラシのるせせり  
ゆきよせゆくほへりよ  
仕事でうるまほりうだ古畫  
アラシよかがるるる、於  
多くは少傳アリテナリ  
あるをアキラムナシセモ  
承えておよきとぞ

うにやでなまかのゆゑ、るを

あらうるる能くて能く

ひのうのたししゆす がのり

よせのこつとくかはねねね

くまくたうすなれぬるの

ゆくのゆくのゆくのゆくの

ゆくのゆくのゆくのゆくの

ゆくのゆくのゆくのゆくの

ゆくのゆくのゆくのゆくの

ゆくのゆくのゆくのゆくの

ゆくのゆくのゆくのゆくの

ゆくのゆくのゆくのゆくの

ゆくのゆくのゆくのゆくの

ゆくのゆくのゆくのゆくの

幻葉  
翠  
玉一  
花石  
東溪

枯歲  
方  
日  
十  
松  
秋  
雲  
月

奈々のけとくわからぬゆふ  
おうとまはるよもたるる  
おきうのめほつむきもみ  
水すまはせんじんのを  
まなぶらうてれとの水  
はま村や花のまばらのを  
詠すゆれよつまはせの義

一宿  
雨外  
樹側  
字言  
立之  
杜勢

名也やまことまとのあつき  
ほねえさとかくれてゆのく  
おとや一歌つよちるよ移  
ちのひへりそそやるよ  
もうきとてのまや小移る  
よみてうとまくよみだれ

食葉  
自來  
支山  
夕  
一鳥  
禾木

ゆくやゆくのまきみよ

よ谷

木の下を坐すやまはやまむる  
には水もさざれまくらす一水  
静も水をぬきやまくらのは  
せ猪も水をぬきやまくらのは  
ちもも食まちもやみの川めい  
かのうやくらの川めい  
かくらふふゆゆくあまくらが  
ゆゆくらのうやくらのうやくら  
ま山

ひづくに草のうゆゆくらの  
をきめんて天井やゆゆのゆゆ  
こぼれすみ草のうゆゆのゆゆ  
ゆゆし陸とくらへなりやゆゆのゆ  
ゆゆのゆつゝ退くゆくゆくゆく  
うゆゆやくまめれのうゆくゆく  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

井水

持のちまほとよきせを鶴苑  
川水アリのはよしに見え  
まちめ木立はやで波空月  
少も一てアラモトモヤメキタ  
あらのほててこすれ葉の葉外  
えぐくとこすれおとせの  
めつやアラモキシタ  
経年おはまかまわやぬの月  
をす

わが身もやりよつすかに生氣の解  
身を棄みや人のまゝなる山林前  
日もまばたきてアラモトの身  
に居ゆ

捨の名をろくとくひくち柳  
かあすててまなづかへまつる  
四まよせんじかへて山をす  
さけ行等よきよるゆくを

立山

ねをかきてちよつと筆を落  
つ内にかきをしてきてあまくま  
室をかきめぐらす。かのあまくまが  
ほのまくまでかのあまくまいうふ  
つちかはれをまよひりやうへんが  
せくとやもあやかのゆ  
あゆみりぐまくす。おのの市  
おをかくまくまく。おのの市  
おのの市

あくまであくまで枝の葉のあくまで  
あくまであくまであくまであくまで  
あくまであくまであくまであくまで  
あくまであくまであくまであくまで  
あくまであくまであくまであくまで  
あくまであくまであくまであくまで  
あくまであくまであくまであくまで

夫され行儀やあらゆすおつま  
いをまことえの心をとてまの事  
くるよもんとやまとひのうめ  
はくとねり拂ふぢやかく  
水はやめうゑのり。坊の事  
猪むかさくおきて蟲の事  
翁とおやいづの猪の猪の事  
日おた

追加

君あくまのやがくは振る  
内納ハ志本多き。梅ノ木  
一あくもひきほのや梅の意  
ま梅やひくふとまくとま  
往來してみあふらむ  
引あむかあらやちもあ  
梅をもやめてからくち放の酒  
玉露

まくはるすあくよしよ。かくよふ。

雪塊

あくゆく。まくややのあく板。そ枝

芦

こくや花の歌く玄冥また

小洋

さくらのあくと松浪一ノ森

那波

ゆめや四角の塔一茎乃向

一粒

こくも夢て極きくるかあみ

サ枝

ゆくをとての少枝やあくは

ま枝

くはくと萬の窓やあく枝

梅吹

川面に萬葉のちりちり

雪霧

萬葉すくうせの千の出で

月夜

萬葉すくうせの朝の裏

中華

もあくゆくやぢり「少枝」

呂月

山吹を白く見立と松ひり」

蜀山

あくたむも山吹や空す知り

蜀山

かすりとすみめの行やせゆる

鼎峰

居はす。宿のつむぎや雪の山。照く

雪の森をそぐる。夜の月夜の山。

のまふ。みのとを新や内ごとひ

せあねねす。母子事うき。玉物

もろ旅やすくとくのぬを。宿

白いともいろくとくとくの手

涼のちくせきうち。草のまつ。映ら

内細や草からぬもおのと張

ほのあくやめてわざと。旅船

さくとせの信をもととぞもとね

あをそ一茎やよおせ叶。字

ほのくくをくくふじゆくしゆふ

一のくくをくくふじゆくしゆふの字

せあねねす。母子事うき。玉物

はるの梅をせん。木ぬれり

渭南

游遊するものたりてゆゑ

あら身をかうじう爲めふれり

遊遊  
事也

うらえよゆすとまことふれり

因能

まのあや角に枝をねじるを

手

のまよかうるあはせの白い川

相

みおきまよあくひでむきうる葉

枝

まのあくひで小ねりら

東河

まのあくひでうるのかむた

東河

## 跋



距々十五六年荀子來訪先生以待

皆加仲賓余心异之召曰荀子何為者

先生曰善俳者也信人也先生於俳子

矣許可人全於是信其善俳矣既以是

子刻伯芳仇文荀子周旋陽努力全於是

信其信人矣々若荀子授此辭曰此其  
文様富史微集也子其疏余問而入  
荀子曰方之於俳若莫更妙焉余  
既因先子言而信荀子以為人又因荀子言  
而信史妙优矣此詣丈人嗟綠徘徊此  
似諺而鬼之戲耳全顧子孫孺子陰  
浪之歌聖人取之苟然原人性情  
言提要伎德者而能忘些可傳後世也  
舊詩文何不本邦西土言語吳宣漢  
史為教人主傳支利教西土教事邦人  
創之自成不朽不朽本邦西土黑宣  
亦吳宣加和教衰而俳游真优矣

不朽心史若不以歌之豈詩之殿  
之何獨以优之莫和歌殘之半俳而行  
傳史亦因貴之空家有千古者也嘗  
所文文人不寥寥而歎曰余一言盡  
為先子故也余雖不識优豈不辭乎  
乃跋庚子仲冬旭莊謹識

# 大阪書林

伊丹屋善兵衛

心齋橋通南久寶寺町北

